

遮断機 理想の良人

丹羽文雄文学全集 第二十二卷
遮断機 理想の良人



丹羽文雄文学全集 第二十二卷

遮断機・理想の良人

一九七五年九月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二二
電話 東京(〇三)九四五一一二(大代表)・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)

目

次

遮断機……………7

理想の良人……………87

爛れた月……………125

壁の草……………147

歪曲と羞恥……………173

劇場の廊下にて 205

幸福への距離 231

媒体 319

お吟 341

創作ノート 379

装幀・辻村益朗
(写真・妻と、一九六二年自宅の庭にて)

丹羽文雄文学全集 第二十二卷

遮断機・理想の良人

遮

断

機

第一章

ながい踏切だった。ここが、始発駅をかねているので、普通の四倍のながさの踏切になっていた。途中まで来ると、九三はそれまでの歩調を失ってしまいそうな錯覚に陥ちた。わざとゆっくり歩いているような気がする。深夜の駅は、上り下りともに忘られたようにしいんとレールを光らせていた。早くわたりきらねばとせきたてられる。いつもこのながい踏切には、脅迫が待ちかまえていた。へんに歩きにくい。両方の遮断機しやだんきのあたりが、ゆるい坂になっていて、中央部が一つの背になっているせいかも知れなかった。遠くに、赤や青の信号灯が夜の深さを示していた。人影はまったくなかった。追われる心地で、九三は遮断機に近付いた。一台の自動車が事故をおこしたようにとまっていた。遮断機とすれすれのところであった。

運転手が踏切番と、何か話をしていた。運転台の扉は、開けっ放しである。訊けば、簡単にわかるつもりだったろ

うが、踏切番はよく知らなかった。余儀なく運転手は車を降りて、名刺を見せなければならなくなった。踏切番は名刺の番地を見て、その町のあたりを、自信なげに眺めていた。

二人とも、九三が近付いたのには気が付かなかった。九三は、車のうしろを通りぬける位置を歩いていた。訊かれたなら、九三も困る。この辺の地図を、一画を除いた他はよく知らなかった。車の中を見た。瞬間、九三の足がとまった。気持の上では、たしかにそうだった。車内の泥酔でいすいの男は、片足を投げ出し、片足を座席に上げていた。上衣全体が、首筋をつるされたようにつるし上がっている。ネクタイはまがり、ワイシャツは二つ目あたりまでのボタンを外していた。首がめりこんでみえた。片手が腹の上に、投げられていた。よく肥っている掌。九三は、いびき声を聞いたような気がした。

「二七五番地は、二つ目の道を曲ったところだがね、三〇五番というところ……?」

「この辺は、どこも夜が早いんだね。一軒も起きていない」「十二時がすぎてるよ。この道をまっすぐいくと警察署がある。そこなら、夜どおし起きている」

「お客さんは、太平楽だ。小包に荷札をつけたら、目をつむっていても、大丈夫届けられるといった風だから、敵わねえ。のる時に、この名刺を渡して、ここへ俺をつれてい

け……この辺のことは、私は、知らないときてるんだからね」

「その辺の家を一軒々々、表札を見て歩くんだね。仕方がないよ」

九三は、靴音を殺した。すでにかかなりの距離をもうけたが、二人の話し声が聞えたのは夜のせいだった。ばたんと、扉のしまる音が聞えた。九三は、足を早めた。自動車の動き出す気配が、はっきりと聞きとれた。風が吹いて来るように、確実に車が接近してきた。ふり向いてはいけない。車に気がつかないふりをして、一途に家路を急いでいる風に見せかけなければならぬ。上水の烈しい水音が、迫ってきた。彼の足はコンクリートの橋にかかった。渡り切ると、折れるように九三は、左に曲った。自動車は徐行で、すぐそのあと橋を渡って、まっすぐにすべっていった。九三は、ほっとした。すると、うしろめたさが、一段と濃くなった。街灯の少ない、たださえ判りにくい邸町にさまよいこんだ自動車が、うまく五浦調治の家を見つけるとは思えなかった。『その方が、調治自身のためでもある』しかし、他人のような顔をして、停車していたそばをとおり抜けた卑劣さが、胸の中で石となって残った。左手の上水の、早い、水量の多い流れの音が、ささくれだった気分にあざわしかった。九三は、上水に沿って歩いた。

彼の耳には、自動車の音が聞えなかった。気がつかなか

ったといえは、すむことではないか。誰も証人はいないのだ。二人とも気がつかなかった。彼は自分の心にも、不在証明を押しつけることが出来たと思った。右手の、細い道にはいった。上水の音が切り落されたように弱くなり、彼は邸町の静かな中を歩いた。誰も知らないことだが、（この自分だけが知っている）五浦調治を黙殺して、彼の困惑を見すごしたと、自分だけが知っている。彼は胸中に、潮騒を感じた。風が逆に吹いているようであった。波は乱れて、ささくれだって、苛々と打ちよせていた。九三は、波の音を聞いて、また左に曲った。靴音を殺して歩いた。あくまで、さとられまいとした。どこか遠くで自動車が動き出す時の気配があった。とんでもない方向に、のり入れているらしい。九三は、五浦の家に近付いた。

九三は、小さい四ツ角に来ると、立ちどまった。はるか向こうの四ツ角を見つめていると、段々とその一帯が明るくなった。あかりの近付いてくるのがわかった。やがてもっとも明るくなると、車体が明りを押しやり、塗りつぶした。車のすべっていく音が、四ツ角からしばらく聞えていた。九三は隣家のきこく垣にすれすれになって歩いた。彼は、裏木戸の鈴を出来るだけ鳴らさないように、戸をあけた。鈴はどうしても少しは鳴った。すると、台所のすり硝子にあかりがともった。鈴の鳴るのを待ちかまえていた風である。

「ただいま」

もうその時には、台所の硝子戸に大きく、人影がうつつていた。

「おそくなってすみません」

英子は、それが癖の、浅い微笑でこたえた。すぐに消えてしまう微笑であった。九三は靴をぬぎながら、外の気配をうかがった。自動車は、迷っている。

「お茶漬のしたくはしておきましたから」

茶の間に、彼の分の食事が、白いふきんをかむつていた。九三は当てがわれていた奥の間に、靴を置くと、浴衣と着かえた。絶えず聴神経は、外に向いていた。洗面所で顔を洗っている時にも、自動車の近付く気配を聞き落すまいとしていた。自分が何か不正を犯したようである。彼は、茶の間で、あぐらをかいた。自動車に拘泥^{きうでい}っていないふりをしてみるのだが、そんな芸当は九三の柄ではなかった。が、英子に気づかれないだけの芝居は出来た。

英子が、麦のはいったつめたい飯をよそってくれる。昆布の佃煮、漬物、それだけである。湯も、半分はさめていた。英子は妻のように、ひとの食欲を見守っていた。しゃっ中顔を合わせている主人に対して、とくに話らしい話もない、そういった感じから来る妻らしい無関心さである。隣室で、子供が何か言った。英子は、その方をふり向かない。寝言だったらしい。

九三が、顔を挙げた。聞きつけたからである。その時、

英子も、重いものが柔かい地面を踏みつけていく連続的な物音を聞いた風であった。深夜に、一陣の風のように通りすぎる自動車は、たまにはあった。この時の車は、用心をしながら、次第に目的物に近付いていた。英子の表情では、すでに自動車は通りすぎていた。九三は、たくあんの一ト片をかんだ。すっぱい味がする。

呼鈴^{よるい}が、鳴った。

「いまごろ、誰かしら」

九三の眸から、それをさぐり出す風に目を合わせたか、感じるところがあつての仕種^{ししゆ}ではなかった。英子は立ち上がった。車の主が誰であるか、想像もされなかつたろう。白紙の気持で、玄関に出ていった。九三は、茶碗と箸を持って、じいっとしていた。覚悟が出来ていなかった。

最初の英子の声は、聞えなかつた。

「だけど、五浦さんというの、お宅でしょう。さんざんさがしましたよ。とにかくこの名刺のところだからって……」

「うちは、たしかに五浦ですが、その人は、うちの人ではありません」

九三は、息をとめた。英子の声は、冷静だった。いかにも車内の人間が、自分のうちの人間ではないと、誰に見せてもそういうにちがいないという確信につらぬかれてい

た。九三の胸が、高い動悸をうちはじめた。うろたえていゝ自分が、いまましい。自分以外の人間のことで苦しむなど、滑稽である。何を自分はうろたえるのかと、強がってみる必要があった。残り二タロぐらいのお茶漬を食べてしまおうとした。

「おかしいなあ。だって、この名刺の、五浦調治と、この表札は同じ名じゃないですかね。この人は、お宅の人とはちがうんですか」

「うちの人ではありません。この人のところは、ここから七、八町はなれたところに、ちゃんとあります」

おそらく英子は、ちらりと車内をのぞいてみたが、二度とのぞきはしなかったろう。

「そこも、五浦というんですか」

「いいえ、そこは、風早といひます」

「何番地ですか」

「何番地か、私は知りません。町名も別ですから」

「たしかにこの人は、お宅のじゃないんですね。所番地名前も、名刺のとおりだが……」

「少し待って下さい。風早の家をくわしく知っている方がいますから」

その声で、九三はいんと鳴って、からだが沈んでいくのを感じた。が、立ち上がり、玄関に向かつて歩いた。ひとが行動している工合である。英子にあやつられていると

しか覚えなかった。

九三はいまはじめて運転手と顔を合わせるといふ風に、見た。

「風早というのはね……」

彼は、道路に出ていった。英子の扱いに、逆上したと形容してもよかった。他のどのような扱いに会おうと、これほど気持を転倒させることはあるまい。舞台の上の馴れない役者のように、九三は、しかし教えられた台詞と演技だけは無事につとめるといふ風に彼方を指さした。

「二町ほどまっすぐにいくと、四ツ角がある。それを右へ、まっすぐにいく。どこまでもいくと、やがて広い、立派な道路に出る。左の角が、交番になっている。その交番の筋向かいが、風早家だ」

「そこへ送りとどけても、大丈夫ですか」

「そこの人ですから」と、英子が玄関のところから言った。

「狐にだまされたみたいだ」と、運転手は車にのりこんだ。ハンドルに手をかけ、念のために、首をのばした。

「じゃ、このお客さんは、自分ではない名刺を見せたわけですかね」

「いや、その人の名刺だ」

運転手は、顔をもどした。

「何が何だか、判らなくなつた。すみません、ご迷惑でし

た」

泥酔の男は、その間、身動きもしなかった。九三は、遠のいている車を眺めていた。『眠りこけていて、仕合わせだよ、調治』九三は踏切のところで見かけた時から、車のりこんでいるのが自分のような錯覚を、もてあましていた。調治は泥酔して、前後不覚になっているが、もし意識があるとすれば、その意識の分を九三がつとめているわけである。

遠くで、車がとまった。誰もいない、深夜の邸町の四ツ角で、自動車は規則通りにうしろの赤いランプをともした。一度では、うまくハンドルが切れなかったとみえる。前にいったり、あと退りして、その度に自動車がこわれそうな音をたてた。前後にゆすぶられているのが、自分のような気が九三はした。

九三は、ふと、淡い化粧の匂いを嗅いだ。いつそばに立っていたのか、英子が並んで、車を見送っていた。化粧の匂い！ いつにないことである。やがて自動車は方向をかえると、姿を消した。英子の顔を見るのが、不気味であった。化粧の匂いが、厭だった。英子からの言葉を待った。その言葉を、おそれた。英子は何も言わずに、玄関にもどった。

小学校の先生のような英子。世間のことは何もかも心得ているという顔をしていた。軽率に言葉を口に出不さな英

子。立居振舞いが静かで、はめを外したことがないのである。両親に口を利く場合も、九三と話す場合も、子供と話をする時も同じに静かな英子。きめの細かい肌をもっている。蒼味を帯びた白い顔、ほくろや傷跡一つない、つるりとした、卵のような顔をしている英子。肥り気味だが、固くしまった筋肉。口紅をつかったことがない。まして化粧などに、これまでの九三は接したことがなかった。肌の美しさに自信があるのか、化粧をして生地の美しさを殺すことの愚かしさを知りぬいているらしい。少し平面の、大柄な顔。調治が快楽の世界にはいりこんでゆくのを眺めながら、いつも死んだようなふりをしているといわれる英子。調治がだしぬけに孤独を発見して、妻を訓練しようと躍起となるのだが、最後まで潔癖を固守しようとたくらんでいる英子。調治の熱狂を中断させて、意に介しない英子。自分の快楽を決して外に見せたがらない。心と心の大切なことを話題にするのをうとましがらる英子。と言って、嘲笑的でない英子。

九三は、最後の一口のお茶漬を、味もなく喉に流しこんだ。英子が何事もなかったように、そばに坐っていた。『言わなければならぬのだ。自分はこの人のように、黙視するわけにはいかない』ところが、九三の口は重かった。口にするのなら、別のことが言いたかった。

『単に血のつながりというだけじゃないんですよ。宿命と

いえはいんですか。調治君が何をしようと、どこにいようと、いつもぼくがくつついてるんですよ。切れるわけにはいかないんです。彼のこととは、ぼくのこと。

行為がつづいている。まるで一本の根っこです。調治という根がひきぬかれていくと、一しよにぼくも引きぬかれていく。車の中の泥酔の男は、ぼくといつても差支はないんですからね。風早さんの家を教えてやった。それも、調治君のためだけじゃなかった。ぼくの気持から、わざと教えてやったのです。風早さんに対して、ぼくは複雑な気持をもっている。復讐的でもある。未練でもある。いまだってぼくは、あのひと以上の女性に二度とめぐり会えないと思っています。しかし、いつだってぼくの前には、調治君がいる。ぼくはいつだって、調治君に支配されている。小さい時から、彼にぼくは引きずり回されてきたのです。ぼくの人間としての自覚は、屈辱からはじまっている。同じ年齢です。ぼくのことを呼ぶのに九三さんという。ぼくは、調治君と呼んでいる。彼は妾腹の子。お母さんが亡くなったので、三つの時に、ぼくの家に引きとられて、ぼくと同じに育った。ぼくと同じ年齢であることを、ぼくはどんなに憎んだことか。ぼくの青春は、調治君のために殺されてしまった。去勢されてしまった。ぼくは自分の耳を持っていなかった。ぼくは、自分の頭脳をもたなかった。調治君が、ぼくの耳であり。頭だった。それで、いったいどういうこ

とになりますか。屈辱を感じなかったとしたら、ぼくという人間は生きていないことになる。ぼくは、悲しかった。

ぼくは計画的に、彼を転落させようと計った。ぼくの青春を台なしにした、去勢させてしまったにくい下手人に対して、復讐をしないではいられなかった。高等学校にはいったのは、調治君が先だった。官職についたのも、彼の方が一ト足先だった。恋愛をしたのも、調治君の方が先だった。

放蕩の味も、酒の味さえ、彼の方が早かった。それでいてぼくと彼とは、同じ年齢だったのです。風早仁子さんと知合ったのも、調治君の方が一ト足先だった。ぼくが子供のころから、術策を弄するようになったとしても、その罪は、彼が強いものだ。いまごろ自動車は、風早家で押問答をしているでしょう。ぼくは、それを願っていたのではありません。いいえ、あなたがそう言ったからというんじゃない。ぼく自身にもよく判らない心の動きだった。ぼくが会心の笑を禁じ得なかった？ とんでもない。その反対といつても、誇張じゃないんです。いま思い出しても、赤面することがある。どうしてそのことだけが、二十年も昔のことが、鮮やかに記憶にのこっているのか……」

二人は、小川で魚を掬^{すく}っていた。鮒やもろこがとれた。どじょうは捨てることにした。二人は得意になってかえって来た。田圃が切れて、町中にはいってからも、小川はつづいていた。小川は神社の周囲をめぐるって流れていた。ど